

岡山大学医学部附属病院三朝分院長 森 永 寛

1948年創刊せられた岡山大学温泉研究所報告（岡大温研報）は、過去38年間に56号が刊行せられ、わが国の温泉研究に大きな役割を果たしてきたのであった。

大島良雄先生によるわが国初の放射能泉の医学研究報告、またアイソトープを用いての温泉水成分の経皮膚吸収に関する報文は世界にさきがけての報告であった。田中良憲博士の婦人の性機能に及ぼす温泉浴の影響にかんする研究報文は、九州大学温泉治療学研究所に産婦人科部門設立の動機になったに違いないし、北山稔博士によるドイツ温泉医学書の紹介文が現在市販の浴剤開発のきっかけとなっているのである。古元嘉昭博士の研究報告は、炭酸泉浴の作用機序の解明をもたらしたものとして、ことに東・西ドイツの温泉医学界において高い評価をうけているし、谷崎勝朗博士らの慢性閉塞性肺疾患の温泉治療報告は、昭和60年度環境庁特別研究開始の端緒となったのである。

1985年3月、岡山大学温泉研究所は転換改組せられ、岡大温研報は廃刊となった。温泉研究所医学系研究部門は、岡山大学医学部附属研究施設として継承せられることとなった。1939年創立の岡山医科大学三朝温泉療養所（現、岡山大学医学部附属病院三朝分院）は開院以来温泉医療活動を続けているので、温泉医学に関する基礎、臨床の研究成果を発表する機関誌を残しておきたいと考え、三朝分院運営協議会の同意を得て、ここに岡大温研報の続刊としての岡山大学医学部附属環境病態研究施設報告（環境病態研報告）を新しい体裁のもとに発行するはこびとなった。

21世紀を目前に控えて、温泉地医学（医療）の果さねばならぬ責務には蓄し大なるものがある。研究施設・三朝分院の特性を生かした報告となるよう期待する次第である。

(1986.1.30)